

きたたんば ひがしながれ  
北丹波・東流遺跡

**所在地** 稲沢市下津丹下町・下津森町・下津下町西一丁目  
(北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)

**調査理由** 街路改良工事(都)名古屋岐阜線

**調査期間** 平成27年5月～平成27年7月

**調査面積** 390㎡

**担当者** 永井宏幸



調査地点(1/2.5万「一宮」)

**調査の経過** 県道名古屋岐阜線の街路改良工事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成24度に2,320㎡、平成25度に1,000㎡、本年度に390㎡おこなった。調査区は現道に沿って、街路改良部分を対象とした。今年度は県道の西北部分を調査した。

**立地と環境** 遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況4～5m前後である。

今回の調査区は明治17年地籍図によると水田に相当する。調査区の大半は中近世の流路(あるいは池)が横断し、調査中、湧水に悩まされた。

**調査の概要** 古墳時代の遺構と遺物は、調査区南端で確認した。中近世の流路・池001SDによって古墳時代に相当する堆積層が削平されていたことから、001SDの南側に狭い範囲で古墳時代の包含層が残っていた。ここから、幅1m前後の畦に区画された水田を検出した。遺物は水田の周辺から廻間Ⅲ式の壺や甕が少量出土した。

古代の遺構と遺物は、調査区北端で確認した。古墳時代の遺構と同様に、中近世の001SDによって削平されていた。調査当初は、調査区壁面のトレンチ掘削中に、焼土・炭化物を含む堆積土とともに須恵器などがまとまって出土したので、竪穴建物などを想定していた。ところが、トレンチから遺構の輪郭は捉えられなかった。001SDの掘削を進めていくと、001SDの輪郭に007SDとの切り合い関係が判明した。改めてトレンチを設定し、ようやく007SDの断面を確認した。8世紀代の須恵器がまとまって出土し、001SD内から出土する多くの須恵器は007SDに関連する資料群の可能性はある。

中近世の遺構と遺物は、001SDが目玉である。001SDは明治17年地籍図と照合すると、ほぼ水田の区画と一致する。また、検出ラインに沿って、近代以降の畦板と杭列が認められ、遺跡と地籍図の重なりが追検証できた。当初は位置関係と堆積状況から、県道を挟んで南東に位置する12F001SDと同一遺構を想定し、中世の時期をしていた。ところが掘削を進めていくと、出土する遺物に近世陶器が少量ながら認められることから、堆積層の大部分は近世以降であると判明した。加えて、調査区壁面などの堆積層の検討から、大きく2つの堆積に分かれることがわかった。つまり、中世と近世の2時期にわたる堆積層が存在し、001SDの南側は2層、北側は1層で、中世の堆積に近世の堆積が少し北側にずれて堆積していた。また湧水が激しく、作業上の安全から近世の堆積層の途中で掘削を断念した。近世の堆積は南端に斑土状の堆積が認められ、人為的に埋めた痕跡が残っていた。これは12F001SDの状況と類似し、12F001SDも部分的に近世の堆積を含む可能性が高くなった。この斑土状堆積より上位層は、流水性、止水性堆積が交互に認められ、川あるいは

池である可能性を示唆する。中世の堆積層は部分的であり、確定できないが、近世同様に川・溝の可能性を想定しておきたい。出土遺物は、13世紀前後の中世陶器を中心に、古代の須恵器など幅広い時期の遺物が出土した。

**ま と め** 今回の調査は、中近世の川・池跡の可能性のある001SDによって調査区の大半が覆われていた。部分的に削平を免れた古代の溝と古墳時代の水田が調査区の北端と南端に残存していた。ここで、過去2次の調査成果を合わせて振り返る。おおよそ幅5m、南北200mにわたる細長い調査区であったため、遺跡の全容は把握しにくい一方、地形変化の情報は多岐にわたり得ることが出来た。現況に表出しない明治17年地籍図などの土地利用を比較してみると、水田など低い土地利用の地点は流路があり、畑地など高い地点は中世の遺構が展開する。また、古代の遺構は方位に沿った遺構群ではなく、当時の自然地形に沿った可能性が高い。古墳時代の耕作地は農水路と考えた大溝の方向から、古代と同様に自然地形に沿った土地利用が想定できる。

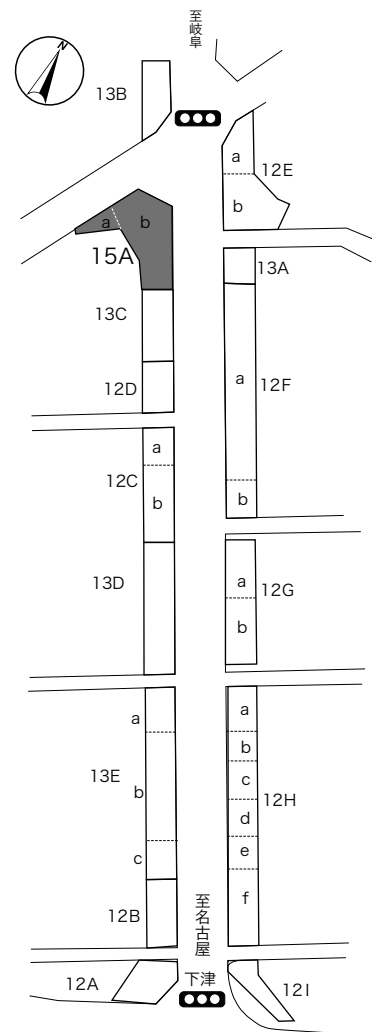
(永井宏幸)



遺跡全景



15A区完掘状況



調査区位置図 1:2,000